

大学での学び 「学問する」＝「意味づける」の練習

後編 1 分間エクササイズで意味づける

今瀬 辰郎

1. はじめに：学習指導要領が目標とする「深い学び」

「高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)解説【外国語編 英語編】第 1 章 第 1 節 改訂の経緯及び基本方針」によると、高校では「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の実現が目標であるとされている。前述の「高等学校学習指導要領解説」では、「深い学びの鍵として『見方・考え方』を働かせることが重要になること」、そして「各教科等の『見方・考え方』は、『どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか』というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方である」と述べられている。106 号で書いた通り、「深い学び」には「解釈」する、すなわち「物事や行為などを判断し理解すること」が含まれている。この「解釈」の意味が示す通り、自分なりに考え価値づけるということが大学での学びにおいて重要であり、だからこそ自分の解釈を表現するために、英語で多用される言い換え表現を理解することが重要であるといえる。本稿では、毎日短時間で深く学ぶための基礎力を涵養する 2 つのアプローチ方法を紹介したい。1 つめは私が約 12 年前、教員 3 年目に考案した方法、2 つめは ALT の先生からの提案をもとに令和 4 年度に試した方法である。前者は実施後アンケートを行って肯定的な回答を得た経験があり、後者は授業の一部で取り上げて手応えを感じたので紹介することにした。

2. エクササイズ 1 なぞかけ式対比関係の構築

1 つめの方法は、なぞかけ式対比関係の構築である。ある英単語の対義語を 1 分間でできる限り多く考えさせて記入させ、解答として挙げた理由、つまり論理の対比関係を発表させる。具体例を挙げると、「nature(自然)の反対は何と説く？その心は？」といったなぞかけを行うということである。唯一解は

なく、解答として挙げた理由を論理的に説明できれば正解となる。約 12 年前の勤務校で特進クラスの Writing の授業開始時に帯活動として行った。

この活動考案の経緯はやはり論理的思考力の伸長に問題意識を感じたことであった。当時初任校 3 年目だった私は、持ち上がりで 2 年生を担当し、訳読式授業から和訳先渡し授業やリテリング主体の授業に切り替えるなど、4 技能をバランスよく習得できる授業方法を模索していた。4 技能のバランスは重要であるが、最終的なゴールとして大学入試で出題される英文、すなわち入学後に読むことになる英文を理解できる言語能力及び論理的思考力を身につける必要があると考えていた。生徒の自己実現を可能にする学力を担保できて初めて生徒も保護者も新たな指導方法を受け入れてくれるという思いがあったからだ。また、自身の 20 年前の留学経験から、大学入学後に必要な、現在の学習指導要領でいうところの「深い学び」につながる力の必要性は意識にあった。そのため、その育成方法を約 12 年前に考案し実践したのであった。

私は大学時代にトライアスロンに取り組み、3 種類の競技の力をバランスよく高める努力を 5 年間行なった。その過程でターゲットとする能力を 1 つ 1 つ細分化してトレーニングを創り出す力、他の競技のトレーニングをターゲットとする競技の能力向上に有機的に応用する力を身につけた。その能力を生かし、「意味を付与する力」も 1 分間のエクササイズの中で 2 次的な学びとして身につけられるようにしようと考えたのであった。

■手順：活動の手順は以下の通りであった。

- (1) 授業開始時に記入用紙を配布し、なぞかけの「お題」となる英単語を発表する。生徒は 1 分間でその言葉に対する対比関係を構築し対義語を考えて用紙に書く。対比関係を構成する論理は時

間短縮のために日本語で記入させた。

- (2) ある程度解答が書けていることを確認してから、生徒同士で解答を共有する時間を数十秒とった。その後2～3分間で生徒を指名して1つずつ解答と解答に挙げた理由を発表させた。論理が構築できているものは全て正解としてアイディアを称賛し、理由の説明が言葉足らずの場合には補助的な質問をしてクラス全体に理解を浸透させた。
- (3) 用紙を回収して授業後に解答を確認し、解答と対比関係が論理的に成り立つと理解できるものであれば○をつけ、正解数を点数化して記入した。日本語で書かれた解答には英単語を追記した。
- (4) 次の授業でフィードバックを行った。未発表の独創的な解答を紹介するなどして生徒の視野を広げ意欲を高めた。

■注意点：注意した点は以下の通りで、生徒に活動の意図を理解してもらい、自信をもって積極的に取り組ませようと試みた。

- (1) 活動の意図の説明
- (2) 初期の時間配分の柔軟化と時間短縮の徹底
- (3) 生徒の学力レベルに合わせたお題
- (4) 生徒の状況に合わせた解答方法
- (5) 生徒に自信をもたせる評価

(1) 活動の意図の説明

始める前に活動の意図を説明し、生徒にその意義を十分に理解させるようにした。英語が読めて各文の言語としての意味がわかる力は当然必要だが、大学での学びのためには論文や専門書レベルの文章の論理や論旨を理解できることが重要である。大学での学びの準備が完了していることを確認するのが大学入試であり、大学入試レベルの英文の理解のためには、essay writingの構成手法である「対比関係(comparison, contrast)」「主張(抽象)―例(具体)」「因果関係(reason)」を見極め理解できることが重要である。英単語や英文が読めても、一定の理解力がなければ、大学入試問題の論旨を理解できないことがあるため、論旨の理解の重要性を伝えた。このエクササイズはそれらの論理関係を自ら構築し論理的思考力を鍛える訓練であり、英語で書かれた高度な文章の論理を理解する、つまり英文読解のために

必要な活動であると説明した。

実際のところ行う活動は、英語で対比関係を作ってその具体例を挙げるということであり、essay writingの「対比関係(comparison, contrast)」の骨子作成の訓練といえる活動、writing活動の一部と見ることも可能であろう。2次試験でessay writingが課される国公立大学の受験対策として、essayの骨子作成の訓練としても有効な活動であると考えている。

(2) 初期の時間配分の柔軟化と時間短縮の徹底

以前に本誌で紹介したいくつかの活動と同様、私にとって、教科書の進度を妨げない程度の時間で実施することがこの活動を行うための前提条件であった。最小限の時間で最大限の付加価値を加えることが付加的な活動についての説明責任を果たすことになると考えているためだ。

1分間を解答記入にあて、約3分間を意見交換の時間にあてており、実質的には3～4分間の活動であった。週に2単位の授業で1回は小テストを実施しており、約半年間、小テストを行わない日に行っていた。実際には、慣れるまでは1分間で解答を記入できる生徒は少ないため、最初の数回は解答時間を2分に延長するなどしたが、それでも1つも解答できない生徒もいた。しかし他の生徒の解答や論理の説明を聞くうちに徐々に要領を得て全員が解答を書けるようになった。生徒が慣れてからは短時間での終了を徹底し、教科書の進度が落ちないように努めた。なお、全ての生徒にタブレットが普及した現在においては、ICTの使用頻度が高くインターネット接続環境の充実した学校であれば、このような帯活動の実施にタブレットを使用して解答を共有するのも1つの手である。ただし、AIを含め他者の意見を借りずに自身で論理を構築することを徹底することが大切であろう。

(3) 生徒の学力レベルに合わせたお題

当時の勤務校は1学年7クラス在籍で国公立大学への合格者は10名程度、都市部の難関私立大学への合格者は1桁であった。特進クラスの生徒の学力は全国偏差値45～60程度だったため、取り組みやすいお題から始めた。具体的には、お題を「色」とした。つまり、「white(白)の反対は何と説く？その心は？」といった具合である。たとえば以下のよ

うな対比関係の具体例を全て正解とした。これらは実際に生徒が書いてきた解答である。white(白)—black(黒)といえば勝敗を表す。white(白)—red(赤)といえば運動会の白組赤組を表す。white(白)—blue(青)といえば空(雲と青空)を表す。white(白)—black(黒)といえば白は生命、黒は死を表す、といった主観的な意見でも、周囲の理解、納得を得られそうなものは全て正解とした。

「black(黒)」「green(緑)」などいくつかの色をお題として活動に慣れさせてから、「nature(自然)」などといったより高度なお題にレベルを上げていった。

(4) 生徒の状況に合わせた解答方法

実施時は毎回前置きなくお題を与え、短時間で相談する時間は取らず脳をフル回転させて記入させ、指名して理由まで発表させた。

お題をその場で発表して相談する時間を与えなかったのは、生徒一人一人に思考し論理を構築する時間と機会をもたせたかったためだ。その場で論理を構築しなければならない機会が訪れるとなると、日頃から論理を構築する訓練を行うことを習慣にする生徒が現われるかもしれない。そうなれば対比関係を軸にした思考の訓練を日々自らに課すことになり、論理的思考力及び意味づける力は伸長するだろうと考えた。

相談時間がないため他の生徒の意見をそのまま受け取って写して答えることはできない、現在でいえばAIやインターネットを活用して導いた意見・論理を借用することもできない、あくまでも考えるのは生徒一人一人、という形式が必要だと考えた。

生徒の学力に合わせて、解答として書きたい英単語がどうしても浮かばない場合は日本語で書いてもよいこととした。あとで英単語を教えるなり回収してから英単語を記しておくなりし、英語がわからなくても解答はできるようにした。

解答を記入したら、周囲の生徒と解答を共有する時間を数十秒とったあと、指名して発表する形式で意見を交換した。プレゼンテーションのような仰々しい形式は活動時間が伸びるため採用は見送った。しかし突飛な解答でも生徒自身が考えた論理を本人が説明し、クラスメイトを説得することが重要であると考えたため、個々に発表させることにした。社

会においても、本人の言葉で新たな考えを論理的に説明し他者を説得していかななくてはならない。唯一解のない問題への意見表明の訓練として解答を発表してもらうことにこだわった。

(5) 生徒に自信をもたせる評価

普段から間違いであれとにかくチャレンジすること、自信をもって間違えるようにと指導をしていたが、この活動を提示した際には、唯一解がない活動であること、論理が成立していることが伝われば全ての解答を正解と判定することを強調した。生徒が発表した解答には前向きなコメントをつけて評価し、記述された解答にも○をつけて好意的な評価を書いた。また優良解答は次の授業において紹介し具体的に褒め称えた。論理がどう解釈しても通らない解答を発表した生徒はナイスライといって肯定的なコメントを返してフォローするなど、発言しやすい雰囲気づくりに配慮した。

■実施における生徒の反応と変化

実施した当時、開始後数回は唯一解がない活動に生徒たちは困惑した。特に難解なことを行っただけではないのだが、ほとんどの生徒が周囲の解答の内容をうかがっているような雰囲気であった。色をお題として2分以上の時間をとっても、1つも解答を書くことができない生徒もいた。半年間実施する中でだんだんと慣れていき、個々の解答数は増え、斬新な解答を発表できる生徒も増加した。Writingの授業は当時教科書の文法問題や補助教材である文法問題集を解いて解説を行うような授業であったこともあり、この最初の5分弱が生徒にとって授業の中で特に真剣な表情で臨んでいた時間だったと記憶している。年度末の授業アンケートでも生徒からは好意的なフィードバックを得ることができていた。

3. エクササイズ2 唯一解のない仲間外れ作り

2つめのエクササイズは、単語の仲間外れ作りである。4つの英単語を並べて仲間外れを探す活動であるが、こちらも唯一解を定めない点がポイントである。どのような要素でもよいので、仲間外れであると論理的に説明ができれば正解と判定する。

たとえば、Halloweenに関する英単語を並べて提示する。以下の問題を1つの設問とし、仲間外れを見つけなさい、と出題する。

例題：mummy, pumpkin, vampire, Santa Claus

読者の皆様も、この4つの単語から仲間外れを見つけてみてもらいたい。一見、Halloweenに関する単語であるか否かという観点に目が行きがちであるが、実のところさまざまな解答が考えられる。たとえば、私が思いつく限りで以下の6通りの解答が可能である。

解答例1：Santa Claus … 3つはHalloweenに関する(仮装や装飾・イメージに使われる)単語であるのに対し、Santa Clausはクリスマスに関する単語である。

解答例2：pumpkin … 3つは植物ではないのに対し、pumpkinは植物である。

解答例3：Santa Claus … 3つはスペルに「m」を含むのに対し、Santa Clausは含まない。

解答例4：Santa Claus … 3つは1語で構成されているが、Santa Clausのみ2語で構成されている。

解答例5：Santa Claus … 3つは一般名詞であるが、Santa Clausのみ固有名詞である。

解答例6：vampire … vampireのみ複数同じ文字を含んでいない、他の語はm, p, sとaなど複数同じ文字を含んだ語である。

上記のように6通りもの解答があるものはまれかもしれない。他にも解答はあり得るであろう。6通りまでとはいかなくても2～3通りの解答が存在するものは珍しくないであろう。

設問の作成方法は、今回提示した設問例のように、季節の行事に関する単語を集めてそれらに1つ別の行事に関する単語を加え、設問を作っていく方法があるだろう。季節の行事にこだわらず、4つの単語を提示してもよい。季節の行事に関する単語を活用すれば、明らかに仲間外れに見えるものが1つ見つけやすく、英語が不得意な生徒も取り組みやすいであろう。

このようにさまざまな観点で4つの単語を見て仲

間外れとなる関係を見出すエクササイズを通して、さまざまな観点から物事を分析し、自分なりに論理関係を構築して説明し周囲を説得する力の基礎を涵養することができるであろう。

4. まとめ

「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説【外国語編 英語編】第3節 外国語科の目標」では、「『見方・考え方』を確かめ豊かなものとすることで、学ぶことの意味と自分の生活、人生や社会、世界の在り方を主体的に結び付ける学びが実現され、学校で学ぶ内容が生きて働く力として育まれることになる」と述べられている。

今回紹介した2つのエクササイズは、英単語を1つの材料として、単語と単語の意味関係を構築する中で物事の論理関係を創造する基礎的な訓練であるといえる。最大の利点は、教科書に関するessay writingのように一定の時間と学力を必要とせず、短時間でクイズのように楽しみながら取り組める点であろう。たとえば、1対1でのキャッチボールやパス練習などの基礎練習がさまざまな球技の高度な連係プレーにつながっていくように、言葉と言葉の関係を創造する基本的な訓練もまた、論理的な思考力の基礎を築く。このようにして育まれた思考の柔軟性や思考を構造化する力が、「深い学び」の鍵となる「見方・考え方」を働かせ、自分の生活や社会、世界の在り方を結びつける力へと発展していく。そしてこの「社会や世界との結びつき」を意識する力は、現代に求められるビッグデータ分析やデータリテラシーにも応用されていくのである。

参考文献

文部科学省(2018)。「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説【外国語編 英語編】」

(岐阜県立岐阜工業高等学校 教諭)

数研出版の教科別メールマガジン

SUKEN Newsletter 配信中!

新刊案内・入試分析・コラムなど、バラエティ豊かな情報を月2回程度お届けします。



数研 メールマガ



で検索!

